

**会話を分析する視点の育成  
—コミュニケーション能力育成のための会話  
教育が行える日本語教員の養成にむけて—**  
Growing the View Point of Analyzing Conversation:  
A Report on the Teacher Training Course for Teaching  
Conversation in a Communicative Way

中井陽子(国際教養大学専門職大学院)  
NAKAI, Yoko (Akita International University)

**キーワード:** 教員養成、会話教育、会話を分析する視点、談話・会話分析、コミュニケーション能力育成

## 1. はじめに

日本語教育において、会話教育を中心としてコミュニケーション教育の需要が高まってきている。平成12年3月に文化庁から出された『日本語教育のための教員養成について』では、「日本語教員として望まれる資質・能力」として、①「日本語教員自身が日本語を正確に理解的確に運用できる能力」、②「言語に関する知識・能力」、③「授業や教材を分析する能力」、④「学習者に応じた適切な教育が行える能力」を挙げている。

こうした日本語教育における教員の日本語の①運用能力、②知識、③分析能力、④教育能力は、日本語の会話教育にも必要である。よって、日本語学習者のコミュニケーション能力育成のための会話教育が行える日本語教員養成には、次の3点が必要であると考えられる。

- 1) 会話の特徴をよく把握して、学習者の会話でのコミュニケーション能力を向上させるための教室をデザインし、実践・改善できる教員の育成(②知識、④教育能力)
- 2) 学習者の会話の特徴を的確に分析し、フィードバックが与えられる教員の育成(③分析能力、④教育能力)
- 3) 教員自身も日々の自己のコミュニケーション活動を客観的に振り返り、日本語教育現場でも学習者や同僚の教員とのコミュニケーションが円滑に行えるように意識的に調整していけるような教員の育成(①運用能力、③分析能力)

上記の能力の養成には、会話を客観的に分析する視点の育成が重要である。この視点により、自己の会話を調整したり、学習者の会話を指導したりできるからである。そこで本研究では、会話を分析する視点の育成を目指した日本語教師養成コースの実践と受講者の学びの結果を分析し、そこから考えられる点について検討する。

## 2. 先行研究

### 2.1 会話教育のための実践と研究の連携の必要性

会話教育のための研究と実践の連携という立場から、中井(2005a、2008)では、母語話者と非母語話者の会話の分析を行い、それをもとに会話教育を行い、そして、会話指導項目の整理を行うという、教師による「会話分析—実践—指導項目化」という絶え間なき循環の必要性を述べた。その上で、中井(2005b)では、日本語教育能力検定試験の会話データ聞き取り問題の分析をもとに、今後の会話教育のための教員養成で必要とされる点を指摘した。それは、学習者の会話を瞬時に冷静に分析し、適切にフィードバックできる分析者・教育者の視点の育成である。そのためには、談話に関する基礎的な指導項目を理解し、その指導方法を常に分析・開発していくための訓練が必要であるとした。

### 2.2 教員養成における談話・会話分析の実践

三宮(1995:60)は、コミュニケーション能力向上のためには、「自らのコミュニケーション活動を対象化し、モニターし、コントロールする」というメタ認知能力が必要であるとしている。そこで、三宮(1995)は、学部生対象の教職課程のコースにおいて、受講者自身が参加する討論の談話を録音・録画、文字化して、自身の発言スタイルや態度、視線、姿勢などをモニターするというメタ認知能力を向上させる授業活動を行ったという。それによって、受講者に討論でのコミュニケーション方法の知識と経験を身につけさせたという。

堀口(2004)は、学部生を対象に、自分自身や周りで用いられている日本語に意識を向けるために行った日本語教師養成コースについて報告している。堀口(2004)によると、受講者が日常生活で「気になることば」をメモして、クラスで話し合いをするという。また、受講者が自身の話しているところを録音して自己分析した結果、あいづちやフィラー、敬語など、ことばの機能や、場面によることばの使い分けを意識化したという。

三宅(2004)では、学部生の日本語学ゼミにおける、携帯メールについてのグループ分析、発表、コメント交換、レポート作成の活動を報告している。三宅(2004)によると、このような活動を通して、受講者たちが、自身の周りの言語行動に興味を持ち、自身の生活や人間関係を考えるヒントとし、物事を分析的に見る視点を持

ち、さらに、グループ活動による協働学習からクラスメートと親しい人間関係が結べるようになったとしている。

本研究で分析する教員養成コースでは、以上のような、「a.会話の研究と実践の連携」(中井 2005a, 2005b, 2008)、「b.教員養成でのメタ認知能力の育成」(三宮 1995)、「c.他者と自己の会話の分析による意識化」(堀口 2004)、「d.言語行動分析による社会生活のヒント獲得」(三宅 2004)、「e.グループ活動での人間関係の深まりの体験」(三宅 2004)という観点を取り入れている。

### 3. 日本語教師養成コース『文章・談話論』実践例

#### 3.1 講義の概要

某私立大学における社会人対象の『オープンカレッジ日本語教師養成講座』のうち、筆者が担当した『文章・談話論』の講義を分析する。この講義は、全2年間の養成講座(420 時間)の中の1学期目に、月1回程度の頻度で4回(計 12 時間)行われた。受講者は、年によって変動し、20 人～40 人程度であった。講義の目的は、会話教育に活かすために、談話についての基礎的な指導項目を理解し、客観的に会話を分析する視点を養うことであった。この『文章・談話論』の講義3年分(受講者総数 90 人程度)のデータを分析対象とする。

【表1】のように、講義の構成は、主に、①「談話・会話分析と指導項目の先行研究の紹介」、②「会話データの分析と発表」からなる。

【表1】『文章・談話論』の講義の流れ

実施回	講義内容・課題
1回目 (180分)	1. 自己紹介(研究・教育活動の概要): 「文章・談話分析—教育実践—指導項目化」の循環の必要性の指摘 2. 『文章・談話論』講義概要の説明 3. 談話・会話分析の紹介と検討 4. 談話・会話分析の視点を生かした日本語教育実践研究と会話指導項目の紹介 (cf.中井・大場・土井2004, 中井2002, 2005a)
第2回目 (180分)	1. 談話・会話分析の先行研究の紹介と検討: ・コミュニケーションの民族誌 ・電話の始め方・終わり方、会話の諸相 ・非言語コミュニケーション (cf.橋内 1999 10章～13章) 2. 会話データ分析の練習: 初対面会話、ロールプレイ、ストーリーテリング、課外活動ビデオなど 3. 受講者同士の会話のビデオ撮影
第3回目 (180分)	1. 談話・会話分析の先行研究の紹介と検討: ・会話のまとめ方(cf.南 1972, 1993)

	・聞き手の役割(cf.堀口 1997) 2. グループごとに会話データの分析
第4回目 (180分)	1. 会話分析グループ発表の仕方の確認 2. 会話分析グループ発表と質疑応答

#### 3.2 講義の活動内容

##### ① 談話・会話分析と指導項目の先行研究の紹介

まず、母語話者と非母語話者の会話の分析例(cf.中井 2002, 2005a)を紹介し、客観的に会話の特徴を見ていく視点の導入を行う。そして、このような視点を生かした会話教育の実践研究と、談話レベルでの会話指導項目(cf.中井・大場・土井 2004, 中井 2005a)の紹介を行う。これにより、日本語教師として、談話・会話分析を行い、そこで得られた知見を会話教育に活かしていくという「a.研究と実践の連携」を全体像として捉えられるようにする。次に、発話状況、スピーチ・イベント、発話行為、ターンテイキング、隣接ペア、修復発話、遮り発話、共同発話、会話の構造・まとめ、非言語行動、聞き手の役割などの会話の分析観点(cf.橋内 1999, 南 1972, 1993, 堀口 1997)を詳しい例を示しながら導入する。この際、受講者自身の言語生活に引き付けて、このような会話の特徴がどのような時に見られるかについて、グループやクラスで検討し、意識化を図る(「d.社会生活のヒント獲得」)。さらに、講義で学んだ会話分析の視点で電車の中や会社などの周りの会話を観察してみるように促す(「c.会話の分析による意識化」)。

##### ② 会話データの分析と発表

まず、母語話者同士や母語話者／非母語話者の参加する会話のビデオを視聴し、見た感想について3、4人のグループとクラスで自由にディスカッションし、「c.会話を分析する視点を意識化」することを図る。例えば、会話で起こった沈黙の理由の分析(cf.中井 2002, 2005a)、いくつかの初対面会話の開始部の比較分析、非母語話者によるロールプレイ(例:挨拶、励まし、なくさめ)から表れる文化的特徴の検討などを行う。

次に、受講者たち自身が参加する会話の分析活動を行う(「b.メタ認知能力育成」「c.意識化」)。まず、撮影・分析したい会話の種類ごとに(例:初対面・知人の雑談、討論、ロールプレイなど)、2～5人の会話データ分析グループを作り、別室にて会話をビデオ撮影する。ロールプレイは、市販の日本語超上級学習者用のロールカードを選んで、話題、状況設定を指定して行う。そして、グループごとに撮影した会話ビデオを CD に焼

付け、受講者に配布する。受講者は、宿題としてCDの会話データを視聴し、会話ビデオで気づいたことをワークシートに記入してくる。次の講義で、グループで1台PCを使用して、会話データを視聴しながら、そこで気づいたことについて、講義で紹介した先行研究を踏まえつつも、自由にディスカッションする。その際、グループでお互いに会話の時に何を考えていたのか確認し合うフォローアップ・インタビュー(cf.中井 2002)を行い、会話中におけるお互いの意識のずれや配慮していた点などを意識化することを図る。そして、会話の分析点を絞った上で、会話分析のグループ発表のレジメと会話文字化資料を講義活動以外の時間も用いてグループで作成してくる(「e.人間関係の深まりの体験」)。

グループ発表当日は、ビデオ、レジメ、パワーポイントなどで分析した部分の会話を見せながら、分析結果について、グループで発表と質疑応答を行う。さらに、発表に対する感想シートにも記入して、交換する。

【表2】に、受講者達が分析した会話分析の項目の例をまとめた。ここから分かるように、受講者達は、講義で紹介した分析項目を土台としながらも、それ以外の多くの新たな項目に着眼して分析していたと言える。

【表2】 受講者による会話分析項目の例

会話の種類	グループ分析項目
雑談(初対面、知人) 討論 話し合い	会話の開始部、話題、話題転換、ストーリーテリング、受け取り方の違い、自己開示 ターンテイキング、主導権、聞き役、調整役、司会者の役割、質問表現、まわし返答、あいづち、評価的発話、笑いの意味・機能、思いやり発話、婉曲表現、メタ言語表現、ファイヤー発話のスピード、沈黙、間、沈黙回避、遮り非言語行動(身振り、視線、うなずき、おじぎ、相手との位置関係、姿勢) 言葉の強調、重複発話、繰返し、感嘆詞、呼びかけ、指示詞、文末表現、終助詞
ロールプレイ(説得、苦情、依頼、断り、交渉)	質問と応答、交渉の縫れ、話の切り出し、提案の表現、沈黙、話題回避、省略、語尾「けど」、語尾の調子、直接的な表現、あいまい表現、同時発話、畳み掛け、切り返し、遮り、怖い話し方、ファイヤー、笑い 非言語行動(視線、手振り、表情、姿勢) 発話スピード、発話の長さ、ピッチ、声量

以下、受講者達の会話分析のうち、自分達の会話で起きていることを客観的に捉えて分析しているものを2例取り上げる。

1つめの例は、自分達の「初対面の4者会話」におけるターンテイキングの成功と失敗例の分析である。この

グループの会話分析の発表によると、会話分析例(1)にあるように、17A で会話参加者 A が自身の日本語教師を目指すことにしたきっかけを語る。そして、18A で他の参加者に視線を向けながら「皆さんはなぜですか。」と質問表現でターンを投げかける。すると、19B で参加者Bがターンを取り、B自身のきっかけについて述べているので、ここは、ターンテイキングが円滑に起こり、成功した例であるとしている。その成功の要因としては、話題が日本語教師を目指すきっかけという参加者全員に共通の話題であったことと、視線と質問表現によって次の話者が明確に指定されていたことであると指摘していた。しかし一方、27D で参加者 D が日本史を専攻していることについて述べたが、話が途切れてしまったので、参加者Cは30Cで「日本史、私、大学の時専攻しました。」と述べることによって、参加者 D にもっと日本史の話が続けてもらおうと期待したという。だが、他の参加者 A,B,D は、参加者 C が自身の日本史専攻の話を展開させるのだと期待したため、33 行目で沈黙が起こってしまい、ターンテイキングに失敗してしまったと分析している。その失敗の要因としては、30C の発話が質問表現ではなかったため、次話者が明確ではなかったからであるとしている。そして、このグループの発表の結論として、質問表現を用いたターンテイキングは成功しやすい、また、言語だけでなく、視線やジェスチャーなどの非言語的な要素によってもターンテイキングが起こるとし、このようなことについても会話教育で取り上げるべきだとしている。さらに、会話の練習を行う際は、2人以上の会話では次に誰がターンを取るのかを決めるのが難しいため、はじめは2人の会話から始めるのがよいと結んでいる。このように、受講者は、それぞれ自分達自身が参加する会話を分析することによって、自身の問題として会話で起こっていることを捉え、内省し、どのように改善できるか、どのように会話教育に活かせるかを考察していることがうかがえる。

**会話分析例(1): ターンテイキングの成功と失敗の例**

17A: 私は働いているんですけど、えっと大学のときは九州の方の大学に行っていて、そこで国際学生とよく一緒にいたので、日本語教師をちょっと学んでみようかなと思いました。

→ 18A: 皆さんはなぜですか。 {3人を見た後、Bを見る}  
⇒ **ターンテイキング成功例**

19B: 私は国際開発学部なので、学校にもたくさん留学生の方が多く来てるんですよ。 (Bがターンを取る)

(省略)

27D: 僕は大学院で日本史を勉強しているんですけど、  
(Dがターンを取る)

28ABC: はあー。

29D: ちょっと、あの、韓国人の方にね、色々教える機会があつて、それをした時に、やっぱり、その、日本史だけじゃなくて、日本の文化とか日本語を含めた形で教えられるという、世界広げたいなと思ってちょっと受講することにしました。

→ 30C: はあー、日本史、私、大学の時専攻してました。  
⇒ **ターンテイキング失敗例**

31 全員: {笑い}

32C: はい。

33 全員: {沈黙} (誰もターンを取らない)

34 全員: {笑い}

2つ目の例は、受講者達が演じて撮影した「苦情を言う」ロールプレイのグループ分析である。このグループ分析では、マンションの上の階の住人に騒音で苦情を言う場合、当事者同士で話す場合と、大家が間に入る場合では、どのように話し方が変化するかという比較をしていた。分析結果としては、直接その上の階の住人に苦情を言う場合には、「けど」や消え入るような語尾の調子で終わり、発話スピードも遅く、沈黙があり、手が忙しく動いていたという。一方、大家が後からその会話に参加した時には、苦情を申し立てる者は、大家を取り込むために大家に向かって間髪入れずに直接的な表現で申し立てている様子が見られたという。

以上のように、自らが参加する会話の分析活動を行うことで、受講者達自身のコミュニケーションの仕方を考えるきっかけになったと思われる。それによって、会話の教室活動を考える参考にもなったであろうと言える。

#### 4. 『文章・談話論』の受講者の感想の分析

以上、会話を分析する視点を育成するための日本語教師養成コースの概要と受講者の分析例から、受講者が学んだ分析の視点を見た。次に、受講者がこの講義でどのようなことを学んだと感じているかについて、毎回の講義の後に提出する「講義感想シート」と、講義終了から6ヶ月経ってから行った講義アンケートと個別インタビューの結果をもとにまとめる。

##### 4.1 会話分析の視点の獲得

講義に参加することによって、今まで意識しなかった会話の特徴に気づくようになったと、ほぼ全員の受講者が述べていた。なかでも、以下のように、講義で行った録画ビデオによる会話の分析をきっかけとして、日常生

活でも他者の会話の分析と自己の会話の分析を以前よりも意識的に行うようになったと述べている受講者がいた。また、自身の会話のビデオ撮影と分析に関しては、戸惑いを感じた受講者もいたようであるが、自身を客観的に見られる利点を挙げていた。

##### ①会話の文字化

\* 会話を文字化してみることで、普段自分たちが、話している言葉を客観的に知ることが出来た。その結果として、短い会話の中にも、あいづちや、同意、質問など、非常に多くの要素があり、驚いた。

##### ②録画ビデオ分析とビデオ撮影について

\* ビデオで非母語話者と現実に向かい合って会話のギャップや齟齬が生ずる場面などを見られたことは大変、有意義でしたし、普段見られない自分の会話を目の当たりにできたことは今後も大いに役立つと思います。

\* ビデオカメラによる授業は、最初、慣れないためにビックリしました。しかし、映像と音声を繰り返し確認することにより、普段、自分では気が付かないことに触れることが出来、大変ためになりました。

##### ③他者の会話の分析について

\* 電車の中の小・中・高校生の会話も今までは興味を示さなかったが、最近楽しんで聞いています。

\* このクラス以来、会社の会議でのやりとりを別の視点から観察することができるようになりました。

\* 会社の新人への教育などの際、相手の反応をより深く観察できるようになりました。

##### ④自己の会話の分析と調整・改善

\* ビデオで見て、「自分はこういうふうにしてしゃべっているんだ」と思いました。舌足らずで、語尾がぼやけるしゃべり方を時々しているのに気がついて、今気をつけています。

\* 「今こんなこと言っちゃったけど、まずかったんじゃない。本当は語尾をこういうふうにした方が良かったんじゃない。この次はちゃんと言おう。」など振り返るようになった。

\* 冷静に相手の様子が見られるようになり、家族や会社の人達とコミュニケーションが取り易くなった。

\* 最近では会議などで、「この人の言いたいポイントは何だろう？ また、この人の疑問を一発で解決してあげられる解答はどんなものだろう？」と考えることが多くなりました。

#### 4.2 グループ活動

グループ活動を多く取り入れた講義については、受講者同士がお互いを知り合うきっかけになっており、コミュニケーションの深まりを実体験することができたとしている者が多かった。一方、発表準備などのグループ作業は、グループによっては時間的、相性的にうまくいかなかったところもあり、問題が指摘されていた。

##### ①グループ活動の利点

\* 一方的に聴講するだけでなく、グループ学習をする事で様々なタイプの人達の考え方を知ることができ、自分自身もあれこれ考える機会ができ、新鮮な授業でした。

\*1つの発話について、グループの人達がそれぞれ違った受け取り方をしているのが分かった。

\*自分の興味のあることだったので、グループ発表でちゃんとしたものを作りたいと時間を惜しまず取り組んだ。グループで話し合っていると、先生が示された分析の枠組みに留まらない意見が出てくることもあり、自分たちのオリジナリティーを広げていった。

\*グループワークで研究することによって、自分達で分からないことがどんどん出てきた。学ぶという過程、学習者の気持ちが改めて分かった。

## ②グループ活動の困難点

\*限られた時間内だったので、班の構成人数や人員による差が大きく出てしまい、研究がやりやすい班とやりにくい班があったようだった。グループ学習の際に、もう少し班を工夫して組めたら良かった。

## 4.3 会話分析の会話教育への応用

会話分析による会話の特徴の意識化によって、会話教育での指導の可能性について触れている受講者もいた。また、お互いのグループ発表を聞くことによって、会話教育への示唆が得られたとしている者もいた。一方、今回の講義は時間の制限もあり、主に、会話分析の視点の導入と分析に焦点を当てていたため、もっと会話教育への応用を具体的に扱って欲しかったという要望も見られた。

### ①会話教育への応用の可能性

\*談話の分析をすることでコミュニケーションの問題点を明確にして相互理解を深める手法を学習することは、日本語指導で大切に役立つおもしろい研究だと思います。

\*日本語を母語とするもの同士でさえ、誤解を招いてしまったり、伝えたいことが伝わらないなど、コミュニケーションが難しいのであるから、様々な部分で異なるノンネイティブと話を交わすのは、さらに困難である、とあらためて感じた。その上で日本語教師は、文法などの言葉そのもののみではなく、コミュニケーションにおいて大切なこと(相づちや身ぶりなど)も伝えていかなくてははいけないと強く感じた。

\*他のグループの会話の発表を聞いて、初対面の会話や、大家さんを通した苦情の会話など、場面場面での会話を、難易度と順番を考えて、取り入れていきたいと思いました。

### ②会話教育への応用のための活動の必要性

\*いろいろな場面での会話の分析を学習したが、実際の日本語学習者を相手に会話の授業を行う場面、つまり教師と学生の会話の場合の気をつけるべき点だとか、こうしたほうが効果があるという具体的なことを知りたいと思った。

## 4.4 講義の時期・期間

今回の講義は、2年間の日本語教師養成プログラムの1学期目に行われたので、日本語教育の知識と経験不足のため、会話分析と会話教育の意義を消化するには、時期的に早すぎたようだと言っている受講者もいた。また、4日間の講義では短すぎるという意見もあった。

\*「談話論」はどちらかと言うと実践論に近いと思うので、他

の理論や手法の概論的な講義を受けてから、どんな意味合いがあったのか捉え返し、意味合いがより解った。

\*講義時間数をもっと多く取った方がいい。内容を理解し、つかめたぞ！おもしろい！と思ったところで終わってしまうからです。人間のコミュニケーション自体を見るのだから。

## 5. 考察

以上の講義の活動内容、受講者の会話分析内容とコースに対する感想の分析から、以下3点が考えられる。

### ①会話分析による視点と自己の会話調整能力の育成

講義では、日本語の会話教育のための談話・会話分析の視点を取り上げ、生活の中の会話を観察することを促した。その結果、受講者達は会話の特徴、重要点について意識化するようになり、また、それが社会人の受講者にとっては、家族や会社などの自分の生活環境の様々な文脈で役立つようであった。学習者にコミュニケーション教育を行うためには、まず教員が自身の日常生活でのコミュニケーションに意識的になり、自身のコミュニケーションを調整していく能力が必要であろう。

さらに、このような日本語教育のための会話分析は、職場でのコミュニケーションなど、日本語母語話者への日本語や異文化コミュニケーション教育にも必要なのではないかと考えられる。例えば、自身のコミュニケーションの仕方をモニターし、調整して、話しづらい人と話すタイミングをつかむ、家庭や学校、職場での人間関係をよくする、非母語話者との会話の調整を図るなどのメタ認知能力は、様々なコミュニケーション場面で必要となる能力であろう。さらに、このようなメタ認知能力育成によって、教師として客観的に自身の授業実践を振り返り、分析・評価・改善していくことも可能となる。

ただし、自己のコミュニケーションを客観的にモニターしていくことは、時に苦痛を伴う場合も考えられる。特に、自分の会話をビデオ撮影され、それを自分で分析したり、他者に見られたりすることに抵抗を示す受講者もいる。会話をビデオ撮影する前に、受講者一人一人と十分に話し合っておく必要があると言える。

### ②コミュニケーションの実体験

グループ活動を主とした講義に参加することによって、受講者同士がコミュニケーションをしながら、自分達の学びの過程と人間関係の構築過程の経験ができる。そして、それを受講者自身で客観的に観察することで、円滑に行った場合、そうでない場合も含め、コミュ

ニケーションのあり方を学ぶことが可能となる。

### ③会話分析の会話教育への応用

会話の特徴をよく掴んで会話教育が行える教師を養成するためには、会話分析の活動だけでは足りない。会話分析で得られた成果をもとに、会話教室実践の指導項目の設定—デザイン—実施—改善という実践研究のサイクルを一貫して実際に行ってみるとい活動も教育能力を育成する上で重要である。そして、養成コース終了後も、そのような実践研究の成果について、教員個人や共同で、他の教師に発信していけるコミュニケーション能力の育成も必要であろう。それによって、各教員の実践研究の知見を共有して積み上げていくことも可能となるであろう。

## 6. まとめと今後の課題

以上、会話教育のための会話を分析する視点の育成を目指した教員養成について検討した。今回の実践では、会話・談話分析の基礎的な「②知識」の習得と、自己や他者の参加する会話の「③分析能力」という点に焦点を置いて、教員養成プログラムの中の1講義を行った。その結果、受講者の日常生活での会話コミュニケーションの「①運用能力」の変化が見られた。今後は、会話の分析で得られた指導項目を、会話教育の教室活動に取り入れていけるような「④教育能力」を育成する教員養成コースの実践を分析・考察していきたい。

さらに、今後の課題として、教員としての職場での人間関係構築やチームティーチング連携といったコミュニケーション能力育成についても検討していきたい。コミュニケーション教育が行える教員であり続けるためには、教員養成期間中だけでなく、現場で働く教員となつてからも、継続的に教員自身がコミュニケーションを体験できる場を作っていく必要がある。日々教員自身がコミュニケーションの大切さと喜びを実感し続けることによって、学習者のコミュニケーション能力育成を意識した教室活動作りが可能になるであろう。

### 参考文献

(1)三宮真智子(1995)「メタ認知を促すコミュニケーション演習の試み」『討論編』—教育実習事前指導としての教育工学演習から—『鳴門教育大学学校教育研

究センター紀要』9:53-61

- (2)中井陽子(2002)「初対面母語話者／非母語話者による日本語会話の話題開始部で用いられる疑問表現と会話の理解・印象の関係—フォローアップ・インタビューをもとに—」『群馬大学留学生センター論集』2: 23-38
- (3)中井陽子(2005a)「会話教育のための指導学習項目」『話しことば教育における学習項目』独立行政法人国立国語研究所 10-33
- (4)中井陽子(2005b)「コミュニケーション・会話教育の視点から」研究代表者 小河原義朗『音声を媒体としたテスト問題によって測定される日本語教員の能力に関する基礎的調査研究』財団法人日本国際教育協会 35-52
- (5)中井陽子(2008)「会話教育のための会話分析と実践の連携」『日本語学 臨時増刊号 特集 話し言葉の日本語』27.5:238-248 明治書院
- (6)中井陽子・大場美和子・土井眞美(2004)「談話レベルでの会話教育における指導項目の提案—談話・会話分析的アプローチの観点から見た談話技能の項目—」『世界の日本語教育』14:75-91
- (7)日本語教員の養成に関する調査研究協力者会議(2000)『日本語教育のための教員養成について』文化庁
- (8)堀口純子(1997)『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- (9)堀口純子(2004)「2.日本語教師養成の視点からみた「日本語」の教育—日本語を意識すること、表現から場面を想像すること—」『2004年度日本語教育学会秋季大会予稿集』241-244
- (10)橋内武(1999)『ディスコース 談話の織りなす世界』くろしお出版
- (11)南不二男(1972)「日常会話の構造—とくにその単位について—」『月刊言語』1.2:108-115 大修館書店
- (12)南不二男(1993)「現代日本語論への新しい視点談話分析」『国文学 解釈と教材の研究』38-12 学燈社
- (13)三宅和子(2004)「4.日本語教育の技術や考え方を活かした日本語学の専門教育—ことばへの気づきが探究心と知る喜びにつながる—」『2004年度日本語教育学会秋季大会予稿集』246-249